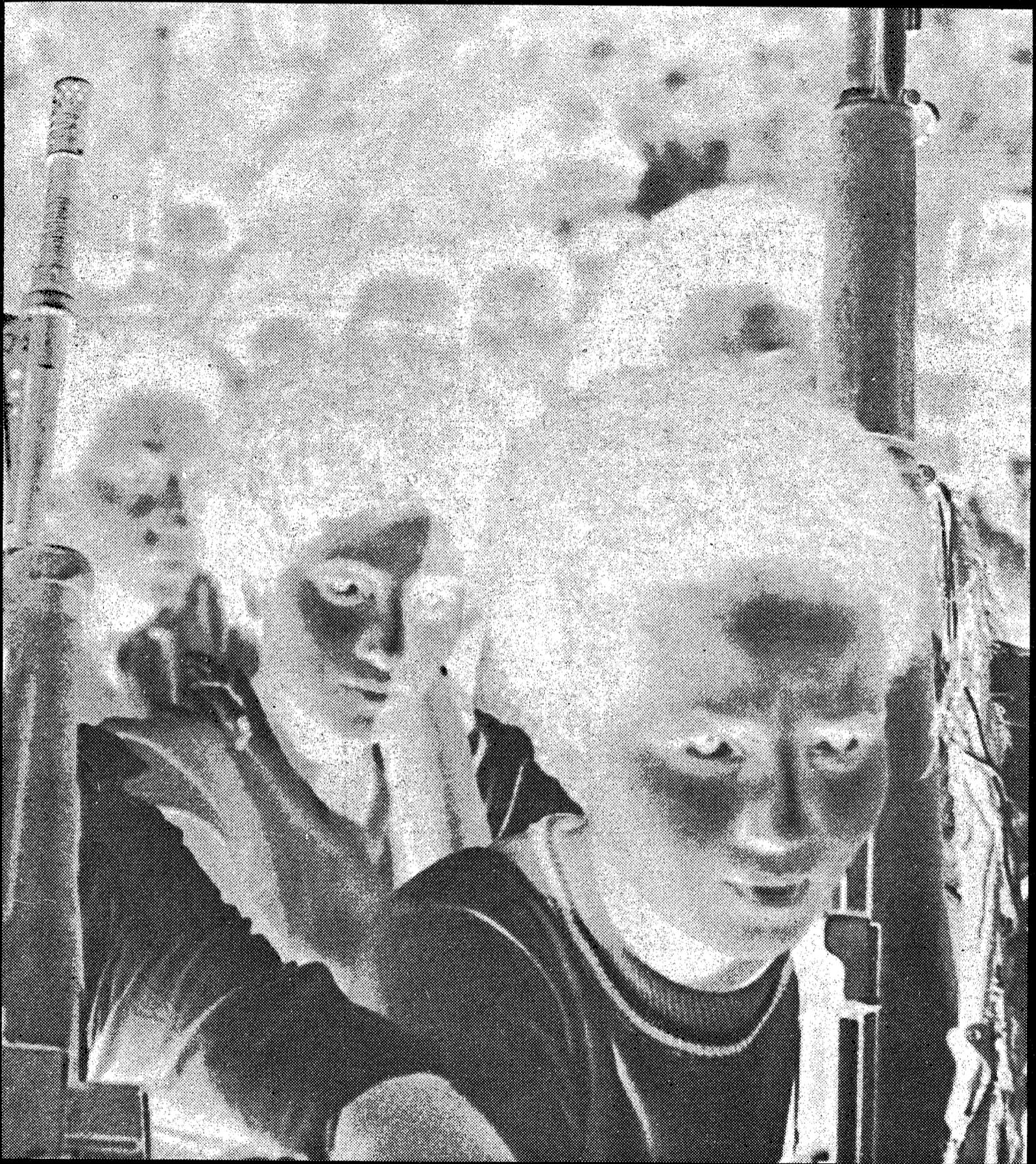


〈特集〉4~5面
前進する第三世界人民と
生産点での労働者の闘い
は一つ

〈座談会〉今こそ職場に闘いの砦を〈インタビュー〉
タイ：ブンソン 南ア：ネエンゲケール

人民新聞

1978年1月5日 通巻第309号
昭和43年12月12日第三種郵便物認可 5、15、25日発行
発行所 人民新聞社 1部100円 購読料半年間2000円
本社 大阪市北区池田町21番安田ビル2階
電話 06 (358) 4376 (351) 9436 振替口座大阪88555
東京多摩支局 立川市柴崎町3-6-3 風林舎内
電話 0425 (22) 5429



【写真】十六年に及ぶ武装闘争を闘い、解放まぢかのエリトリア人民軍の女性兵士

普通動のかけ出した私に先輩が教えてくれた。「わけもなく
くられたらカッとするだろう、機り返さずとする時、痛さや銭
金の計算をするか。人間は一人一人考えも生活も違つ、そして大
むれ損得で動いている。しかしそれを忘れる時がある。政治的とい
ふことは理屈をこねまわす事ではない。『カッ』とするボイン
トを体でわかるようになれ。これがわかれば理論はず、理解出来
る。この道ではない。理論とは遠くをみるためのものだ。遠くを
見ていけば間違ひは近い。近目になるなよ」と。この労働者が名
もなく死んで久しい。私はこの教えをくりかえしつつまた一二年
をとったがまたまたわからない。長い年月の中で演説が上手で分
析や説明や理屈が整然とし、文章が巧く、接すれば自分が恥しく
みじめになるような指導者は多くいた。しかし何度か思い出し方
の湧き出る指導者は実に少ない。時を経て前者は大方向を去り人
民への敵対者やその補充者として今日存在しているのは意識深
い。自らの自由と権利に敏感な人々は増えたが、人民の自由と権
利に鈍感で自分の首を締めている。経済の危機は一段と深化し
人民への政治的圧迫はますます露骨に強化されている。権利と自
由への政治的圧迫の強行に抗する闘いが直接的に結合する
条件はますます進んでいる。新年を迎えて力が湧き起る。(七)

史上最高という倒産、失業の中で一九七八年の幕明けを迎える。
今年には更に不況下のインフレという労働人民にとって最悪の事態
が待ちうけている。思えば馬車馬のように働かされた結果が、円
高・ドル安という今日の泥沼のような状況を生み出したというの
は何という皮肉であるか。

もはや資本主義の下で明るい未来を予測する者は誰もいな
い。この間まで「資本主義は変わった」などと
はやしていたいわけも革新も少なくなつたことが
嘘のように思われる。文字通り「百年が一年」であ
る。今や支配階級層は自信を失ひ只しやむに労働
人民の犠牲において彼等を乗り切ろうとしている。
既にファシズム的なきさしも随所に現われている。
だがそれは、やがて大きな抵抗闘争を巻き起し破
壊せざるを得ないだろう。私達は彼等にかつての道
を歩ましてはならないし、又それはならないと確信している。
比較的恵まれた立場にいる公務員などは安易に流れがちである。
自戒して、ささやかながら闘う人民の一端としての役割を果
し、新しい時代に生きる道を模索したい。共にセクト性を排し、
大きな力に結集しよう。(八)

少々のファシズム政権や少々の戦争では、この危機は教えない
という事態は、資本家や政府にとってはなんとも無意味なものだ
ろう。さあみなという私達の敗色がまた武器を手にしていない
ことがせめてものなぐさめである。敵の苦しみを考えてみるこ
とで味方の楽しみを秘めてみる新年の一日があつてもよいと思
う。自民党政府はペン師的政策しか国民にうつたえられない。
高度成長を止め国債を増大してインフレを抑止して内需を喚起し
て景気を回復するとか、できるわけのないペンを大目玉に言わ
なければならぬところに資本主義の破綻と権力の崩壊の兆しが
ある。いまや大資本の社長も三年後が読めなると次々と白状し
だしている。計画が立たないまま進んでいく未来を失つた資
本の本音が政治に色濃くあらわれざるを得ない。

クーデターや戦争で乗り切れることもできなくなった。これは
国民の「良識」のみである。このインフレをへくする政治
を中心とせざるを得ないのだ。しかし労働者、人民にとっての
ようなインフレは仮装でしかない。日帝、資本の未来に対す
る確信と力に対抗した仮面でしかないものを未来を失つた日帝・
資本が守ることはできないだろう。労働者人民が化粧を落とした
とき彼等はいかんして死ぬべきかを考えるを得ない。(M)

火焔ビン

前進する第三世界人民の闘いと

巴高の嵐の中で七十七年は終った。それは日本経済の強さを示す証しではなく、世界経済の疲弊を示す証しであった。過剰な生産手段をかかえた世界資本主義が、過剰なドルのたれ流しで延命せんことを試みた結果の矛盾を、北へ南へ、西へ東へと振りわけ、ごまかし、自らを追いこめていく過程の一つの現象であった。

そう抱えなくてはならないと思う。自らの狭い経験と自らの世界から、歴史の動きを好むの姿にわくし化してはいけぬと思う。今、第三世界に赤々と革命の炎が広がり、日本帝国主義の中核ともいえる独占の機構に、闘いの槍が突きかかれんとしている時代だから。その二つは深く結合している。その事を実感し、物質化する時代が始まっている。

——今年の十月二十日に軍部のクーデターがおこり、タニン政権が打倒されたが、このクーデターの背景はどのようなものでか。

ブンソン 軍部と王制派の対立が原因だと思えます。昨年十月六日の「血の水曜日」以後の全面的なファシスト政権では支配を維持できないと考えた軍が王制派のタニンを追逐したわけですね。このクーデターによって政府の政策は表面上民主化されました。以前は大衆集会和政治的野党要求の集まりは禁止されていましたが、今ではある程度許されています。

——タイの王制についてどうお考えですか。

ブンソン 七十七年十月十三日の学生による軍事独裁政権打倒以降の国王の行動を、タイの人民はよく知っています。彼ら王室は自ら行動によって自らの権威を失墜させ人民の敵である事が暴露されました。

外国の人がよくタイの人の家に王室の写真を掲げているのを見て、タイ人がまた国王に対して深い尊敬の念をもっているといいますが、それは間違っています。タイにはまた国王の名前を間違って口にしたりして懲役七年の刑に処せられる法律があります。タイの人民が表面上王室に服従しているかのように見えるのはそのためにすぎません。七十七年から七十八年の民主主義時代、「タイ封建制の真の顔」といふ本が出版され、ベストセラーになりました。この本は王制批判をおこなったものです。

——あなたたちは王制打倒を考えているのですか。

ブンソン 公式にはタイ人

国王の権威失墜

統一戦線で大躍進へ

うけました。歴代の政権は都市の工業化にのみ金をつぎ込み、農村が完全に放棄されてきた必然の結果です。

——そうしたなかで、タイの革命にとって農民の組織化は極めて重大な課題だと思えますが、日本の革命闘争について印象をお聞かせください。

ブンソン 日本は日本滞りながら、生残った者が更に闘いを発展させるという味方の団結の必要性です。

——ブンソンさんは日本滞りながら、日本の闘争について極めて有利な条件となるにちがいないと思えますが、どうもありがとうございます。

ブンソン 短い滞在にもかかわらず、あなたに印象的な部分もいくつかあります。イデオロギイを前にして分裂するより共通の目的に向かって共に闘うことからはじめようという姿勢は、目的を実現するためにはもってこいの姿勢だと思えます。

タイでも同じことがあって共産党が都市部の活動家に推薦書として読まされたのは、中国の「愚公、山を移す」という本です。イデオロギイよりも闘いの団結を断念したかたがたでしょう。

——最後に七十八年の展望をお聞かせ下さい。

ブンソン タイの新しい統一戦線の形成によって闘いは勝利に一步一步近づいています。

農村における武装闘争と都市における地下活動の前進によって、より大きな闘いをつくりあげることができると確信しています。更に今年の凶作が来年には大きく響いてタイ経済は益々悪化するでしょう。これはわれわれにとって極めて有利な条件となるにちがいないと思えます。



「アメリカ帝国主義は戦争に飢えた狼」と題した反米ポスター

จักรพรรดินิยม
อเมริกาใน...
กระหายสงคราม

タイ

解放運動指導者が語る 78年は我々の年だ!

南ア

南アフリカ共和国の黒人学生組織(SASO)の創立メンバーの一人、ランウェジ・ネンケケール氏が、十二月十四日来日した。ネンケケール氏は、去る九日に南ア政府の手によって逮捕されたSASOの指導者、スティーブ・ビコ氏と共にSASO創設に参加し、七三年に南ア政府の手で逮捕、拘禁されたが脱獄して、現在はボツワナに亡命中。南アの黒人解放闘争の海外スポークスマンとして活躍している。十七日、大阪の部落解放センターで開かれた集會に参加する為、来阪。人民新聞社は彼に七十八年の国際政治の焦点となっている。南アの解放闘争について聞いた。(文責 人民新聞編集部)

——黒人指導者、スティーブ・ビコ氏の殺害事件は日本の新聞にも報道され、南アでは大規模な抗議行動が展開されているようですが、現地の様子はどうですか。

ネンケケール 大きな反響を呼んでいます。黒人は誰一人として、ハンストの上、彼が看守ともあつて、誤って事故死したという当局の決定を信じずにはいません。こうした南ア裁判所の決定以後も、彼の虐殺に対する抗議行動は止むことなく各地で続いています。

——ビコ氏の死に関する南ア裁判所の不問に付すという決定と重なるように、南アでは総選挙が行われ、与党の国民党が圧倒的な勝利を収めたわけですが、この総選挙の結果についてはどうお考えですか。

ネンケケール 総選挙自体に南アの黒人は何の関心も持っていません。何故なら、自分達が選挙権を持たないからです。国民党の圧倒的勝利が意味するものはいは、南アの白人を守ってやる政党として、国民党がこれまで以上に支持を集めたことではないですか。それだけ危機は深まっています。

企業進出にストップを 結びつき強い南アと日本

——南アフリカにおける南アの役割というのは、中東におけるイスラエルの地位に極めて似ていると思うのですが、南ア政府とイスラエル政府の関係についてお聞かせ下さい。

ネンケケール 経済的な結びつきはもとより、軍事的な関係が非常に強い。解放運動の圧政、弾圧のために、お互いの軍事的情報の交換を緊密に行っています。

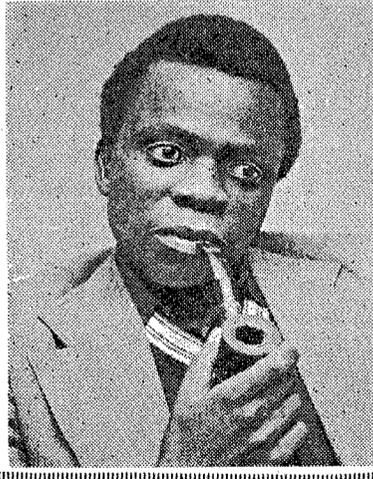
——日本も南アとの関係が濃くなっているわけですが、日本と南アの関係についてはどうお考えですか。

ネンケケール 日本企業への進出には著しいものがあります。南ア商品の日本への輸入、日本製品の南アへの輸出、日本の投資等、南アの黒人達は日本という国を認識せられてきました。黒人達が日本の南ア政府を助けるようになった行動に反対していることは言うまでもありません。こうした日本の企業や政府の態度を改めさせるよう、日本の皆さんが闘いを強められることを希望します。

——最後に、南アの黒人解放闘争の将来についてどのような展望をお持ちですか。

ネンケケール 私達は私達の解放闘争が必ず勝利することを確信しています。それは長い時間がかかるかも知れませんが、将来は必ず私達は勝利にちがいないと思えます。

——短い間で十分お話を聞かせていただきました。ありがとうございました。



「必ず勝利」と語るネンケケール氏

——あなたやビコ氏が創設したSASO(南ア黒人学生組織)についてお話し下さい。

ネンケケール SASOは一九六八年に結成されました。出発は学生の組織でしたが、やがて、黒人解放運動のイニシアチブを取るようになって、政府の激しい弾圧を受けています。昨年六月、南アの黒人指定居住区ソトで起きた黒人暴動は、全国各地で聞かれています。黒人の解放闘争の中心的存在となっています。組織は今

——南アフリカにおける南アの役割というのは、中東におけるイスラエルの地位に極めて似ていると思うのですが、南ア政府とイスラエル政府の関係についてお聞かせ下さい。

ネンケケール 経済的な結びつきはもとより、軍事的な関係が非常に強い。解放運動の圧政、弾圧のために、お互いの軍事的情報の交換を緊密に行っています。

——日本も南アとの関係が濃くなっているわけですが、日本と南アの関係についてはどうお考えですか。

ネンケケール 日本企業への進出には著しいものがあります。南ア商品の日本への輸入、日本製品の南アへの輸出、日本の投資等、南アの黒人達は日本という国を認識せられてきました。黒人達が日本の南ア政府を助けるようになった行動に反対していることは言うまでもありません。こうした日本の企業や政府の態度を改めさせるよう、日本の皆さんが闘いを強められることを希望します。

——最後に、南アの黒人解放闘争の将来についてどのような展望をお持ちですか。

ネンケケール 私達は私達の解放闘争が必ず勝利することを確信しています。それは長い時間がかかるかも知れませんが、将来は必ず私達は勝利にちがいないと思えます。

——短い間で十分お話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

革命の伝統から学ぶ

一九一八年の米騒動から60年

今年は一九一八年八月に発生した米騒動の六十周年にあたる。米騒動は明治維新以後近代日本の歴史上最も最大規模の人民の蜂起だった。これほどの大騒動は米騒動の後にも先にもない。われわれはこの日本人の輝ける偉大な革命の伝統をどのように評価し何を継承すべきか、井上清氏(歴史学者)に聞いた。

(聞き手・文責は編集部)

米騒動の原因は米価の暴騰。安価な外米を買ったことができたが、それは火花にすぎず、労働者、農民、部落民などそれぞれがたががた不満を持ち、ぶつくる時を待ちにまっていたのが当時の状況だったように思う。関西では米騒動が大きな役割をはたした。米騒動が大きな役割をはたしたのには同一生活条件の人たちが地域的に密着して住んでいた事だ。そこでは部落全体が燃え上がった。京都、神戸、岡山、大阪の周辺部などがそうだ。大阪の内河が例外な民のよう近代の工場労働者といえない都市の下層無産者で、大工場の労働者は物価手当てがついてきいてたからだ。

井上 当時米価の暴騰で一番困ったのは調査、看守、小学校の教員など下級サラリーマンと部落民のよう近代の工場労働者といえない都市の下層無産者で、大工場の労働者は物価手当てがついてきいてたからだ。

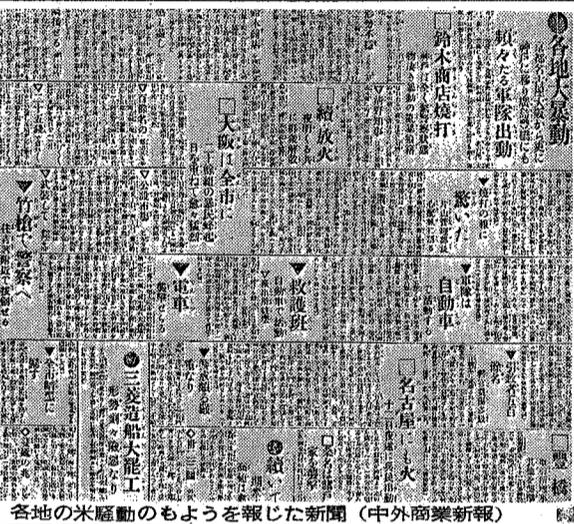
大衆が力に自信

騒動後一斉に運動高揚

米騒動は日本の近代史のなかでどのような意義を持つのか。この層が激しい生活難におちこちで起こった。それは通常小作料の減免など小作争議もからんでいて、貧農は端緒期には米を売る側ではなく買つ側で、農閑期を自覚した一階級の意識に目覚め、米騒動以後一斉に労働、農民、青年、部落解放などあらゆる分野で運動がおこった。

米騒動

第二次世界大戦によるインフレとペリヤ出兵のための米の買占めで一九一七年には一升二〇銭の米が一九一八年夏には一升五〇銭に高騰した。八月三日富山県中新川郡水橋村の漁師の主婦が米価引下げを要求し米の船積み阻止したことに端を発した米騒動は九日には京都、大阪、神戸へと波及、東北から九州まで日本全国へ及んだ。米倉庫、豪商の家が押され、労働者はスト、サボを闘った。軍隊憲兵警察が発砲、刀剣殺で鎮圧、おびただしい血が流れて、九月一日には終息した。



各地の米騒動の模様を報じた新聞(中外商業新報)

博徒がせん動者に

ノータツチの社会主義者

井上 たしかに米騒動以後、労働者の秩序整然とした運動がそれ以後の運動だという見方があるが、

井上 当時の社会主義者は米騒動ができた。中国ではこの本能的な反抗が思想的自覚をもった反抗者、すなわち革命家へ成長していった。

井上 当時とらえて現代の社会は支配構造が下まらぬに組織され、資本主義の構造も強固になつていて、米騒動から何を引くべきか心配しながら、大衆の威力をそで始めてわかつたという状態だった。

井上 米騒動がおこった時片山潜はアメリカにいたが、彼は第一報をきいた時から、最も慮たげられた大衆が立上つたということに決定的意義を見出している。

井上 今日でも日本の運動で一番欠けているのは、左右の日和見主義におちいる事が問題ではなく、革命は最も採取され抑圧されている。

闘争便り

鹿沼署の不当捜査

先日電報で鹿沼署捜査事件がおこった。これにこたえて栃木県内での大々的な過激派がこたえをわけて、超法規的措置が横行している。断固として糾弾する。わが茨城救済センターの会長菅野、実家にも聞き込み、身辺調査など称して(それも本人の留守を狙って)はいかしく、ある会員宅では一度もあらわれ、家人の鳥丸今出川の本屋をレイ社に移したと云う。

情報センター

三年半にわたって京都の闘争者情報センターとして活動を続けてきた梁山泊は十一月一日より活動をも一度根本から問い直して再出発をめざした。梁山泊の設立当初から政治警察の不当な弾圧、妨害が続けられて来た。私達は、今後ともこうした弾圧に対しては断固と闘う決意です。梁山泊で販売していた出版物は、京都鳥丸今出川の本屋をレイ社に移したと云う。

戦後史を採る

戦後動乱期

民間労働者を主体とした十月闘争の成果は、官公庁労働者の要求となり、闘争として引きつがれ、発展していった。

二一 全国ゼネストへの闘争は大きく盛上っていた。ソ連が提案し、極東委員会が十月十八日採択された「日本労働組合を中心とする組織原則」も労働者の闘いの発展に力を与えた。これは労働組合の政治闘争を認め、ストライキに対する政府権力の干渉、弾圧を禁じた。しかし、このゼネストの前途はきびしかった。一月十日、職労連議長は右翼のテロリストに射殺された。

一月十一日、全官公庁共闘はスト態勢確立大会をひらいて要求貫徹のためゼネストを闘うことを宣言し、第二回共同要求を提出した。これも拒否された全官公庁共闘は、一月十八日、ついで二月一日からゼネストに突入することを宣言した。一月十五日、産別、総同盟、中立労組、全官公庁共闘などを中心に

2.1スト中止される

産別、共産党に批判集中



2.1ストに前夜の東京・芝野金局の婦人労働者

トにぞわれ重傷を負った。一月二十日、アメリカ占領軍のマッカーサー少将はスト中止を勧告した。全官公庁共闘は拒否したが、またもや社会党は動揺し、一月二十三日、ゼネスト回避の方針を決定、総同盟も統一行動から離脱を始めた。しかし、労働者は闘いを進めた。一月二十八日、全官公庁共闘実行委員の共催で「吉田内閣打倒、危機突破国民大会」が人民広場に四〇万人を集結して行なわれ「社会党中心の民主政府の樹立」のスローガンがかげられた。吉田の社会党はだまみ工作は失敗し、全官公庁共闘二六〇万、全官公庁共闘二一ゼネストは決定的なものになった。

吉田内閣は無効化した。占領軍が前面に出た。一月三十日、マッカーサーは口頭でスト中止を命令した。全官公庁共闘はこれを拒否した。三十一日午後一時三十分、マッカーサーは正式にストの中止命令を出し、伊井野議長にゼネスト中止の放送を命令した。午後九時二十分、伊井野議長は放送が有名な「一歩前進、二歩後退」の言葉と共に全国に流れた。

戦後最大の闘争は、占領軍によって押しつぶされ、全官公庁共闘、全闘も解体した。

「解放軍」も労働者階級の味方ではなかった。挫折感は大さかった。敗北主義も生れた。反共右派が力を盛返し、産別、共産党の闘争指導にも批判が出た。社、共の対立は深まった。

三月十七日、訪日した世界労連代表団は、日本の労働運動の分裂と企業別組合形態を批判し、機構改革を求め統一への努力を強調した。しかし、これも、世界労連が自由労連の加入問題にすりかえられる状況であった。

社会党の動揺は、かくも戦前の労働運動分裂の総括も不十分で、情勢に追われて見通しも甘く、要求のままに闘争を激発させ、その指導権をにぎることで、全体を方向づけようとして、かえって分裂を生じさせた産別会議、共産党の教訓は、いまも生きています。

(この項おわり)

